

競争的資金獲得研究

学習者の身体知覚および概念化能力を基盤とした
オンライン外国語学習教材の開発とその評価

助成申請者：理工学部理工学科人間情報学系 小崎 充

助成機関：公益財団法人 トランスコスモス財団

助成金額：1,000,000円

研究期間：2022年4月1日～2023年3月31日

共同研究者：地神裕史（国士館大学理工学部教授）、大淵知直（国士館大学法学部教授）

研究の概要

(1) 目的

①背景

21世紀のグローバル社会における円滑なコミュニケーション遂行のツールとしての外国語、特に英語の重要性が強調される中、日本における外国語教育の成果が向上しているとは言えない現状において、より効果的な外国語教授法の導入が強く求められていることは疑いのない事実であると思われる。しかし、その方策として伝統的な Grammar-Translation Method を脱却し、Communicative Approach が主に推奨されてきたものの、日本の教育現場では実際の状況を想定した会話状況を設定するのは、教育環境・設備・人材の面から困難であると言わざるを得ない。したがって、Communicative Approach や Direct Method などいずれの教授法を利用するにせよ、教室外での学習を円滑かつ効率的に行うことが求められる。特に、初級学習者の語彙学習においては、現在でも外国語-母語の1対1の対応関係を前提とした学習による弊害は顕著であると考えられ、母語への翻訳を介在させない語彙学習が強く求められる。

②目的

初級外国語学習者、特に外国語習得に困難を感じている学習者に対し、学習対象言語の語彙学習の際に母語に翻訳した上で理解するのではなく、対象言語の概念を、母語を経由せずに理解するための教材を適切な形で提供することにより、語彙学習効果を向上させる。具体的には、学習者の身体知覚に基づく概念化能力を利用することで、語彙の中心的イメージの理解、記憶を促進するための教材の開発を目指す。

(2) 概要

①概要

特に基礎レベルの外国語の語彙学習においては、学習対象語が表象する概念の近似的翻訳語である母語語彙との1対1対応関係を利用して記憶定着を図ることが多い。

しかし、この学習方法では、当該の外国語語彙と対応する母語語彙の間の単純な対応関係のみを基盤とした記憶に依存するため、学習対象言語および母語の語彙間の意味の相違を理解できないばかりか、機械的な暗記に陥ることにより、運用語彙への展開が困難であるばかりではなく、記憶定着率も低くなる。本研究では、学習対象語彙に対する近似値としての母語語彙を提示するのではなく、対象語彙が表象する概念を人の身体知覚に基づきイメージ化したものを静止画像または動画として提示することにより、学習者の思考内での概念活性化を促し、脳内での概念ネットワーク形成の誘因となる刺激としての入力を提供する具体的な方法を検討する。このような手法は、特に従来から利用されている全身反応教授法（TPR: Total Physical Response 法）との共通点もあるが、TPRは単純な身体動作を意味する語彙を中心とした教授方法であり、抽象レベルの語彙学習には向かないため、主に幼児を対象とする外国語教育の現場での活用に限られてきた。しかし、概念学習に焦点を置いた本アプローチにおいては、抽象レベルの語彙学習への応用が可能のため、例えば大学生レベルの外国語語彙学習での活用が可能となる。

②研究の計画・方法

子供向け辞書から基礎語彙を選択し、そこでの語義の定義に基づき、それぞれの語の基盤となる中心概念を抽出する。その上で、そうした中心概念を表象するイメージ図やイメージ動画を作成し、実際に学習者に提示、学習させる。その後、記憶定着率や語彙運用能力の試験を実施し、学習効果を測定する。

③期待される研究成果

言語間の翻訳に基づく語彙学習ではなく、身体認知を基盤とした概念重視の語彙学習を実践することにより、学習者の語彙知識定着率が向上することが期待され、特に認識語彙レベルだけではなく、運用語彙レベルでの語彙力の増強が見込まれる。